

研究ノート

日韓併合期・日本人は何を考えていたか②

鄭 大均（東京都立大学名誉教授）

第一章 山河の風景

韓国への旅

個人的体験から始めたい。初めて韓国に行ったのは1975年夏のことで、父に再会するのが目的だった。旅の道連れになったのは、フィラデルフィアからやってきた非暴力活動家のリリアン・ウィルビー(Lillian Willoughby 1915～2009)とソウルの大学を出た後、東京にしばらく滞在していた韓国人青年の三人で、この三人組をセットしてくれたのはAFSC(アメリカ・フレンズ奉仕団)というクエーカー系の人道奉仕団体に務めるS氏だった。リリアンとは前年、フィラデルフィアのライフ・センターに滞在していたときからの知り合いだった。ライフ・センターはクエーカーの非暴力主義やベトナム反戦運動の系譜に連なる社会変革運動のためのコミュニンで、その地に私は10ヶ月ほど滞在していたのである。

リリアンのこのときの訪韓が、彼女にとって何度目のことになるのかは忘れてしまったが、韓国の当時の反体制運動の元老的存在であった咸錫憲(1901～89)に会うのが目的で、咸錫憲は韓国では数少ないクエーカー教徒だった。もう一人の韓国人青年については、日本での活動によく判らないところがあるから注意したほうがいいと、S氏はいう。S氏は韓国によく出かけ、反体制活動家たちに接触する人間であったから、韓国中央情報部(KCIA)の動きには敏感で、この韓国人青年に若干の疑念を抱いていたようである。

アメリカ・フレンズ奉仕団は1947年、イギリス・フレンズ協議会とともにノーベル平和賞を受賞した団体である。S氏がその仕事を勤勉にこなしていたことには感心したが、あの時期に彼が宣教師ヴィザを使って日韓を往来し、韓国の活動家たちから受け取った資料や文書を、日本の岩波書店『世界』誌の安江良介編集長に手渡し運び屋の仕事をしていただ、ということを知ったときには驚いた。安江良介に伝えられた資料は池明観(当時東京女子大教授)に手渡され、それがあの時代の反韓キャンペーンの重要なテキストになる「韓国からの通信」(『世界』に1973年5月号から88年3月号迄連載)を生み出していたのである。安江良介も池明観も北朝鮮の金日成に基本的な信頼を寄せる人で、『世界』も『韓国からの通信』も韓国の朴正熙政権を独裁政権として激しく批判したが、北朝鮮の本物の独裁を批判するということはしなかった。

さて出発の朝、われら三人は列車で東京を出発し、下関に到着、その日の夕方には無事釜山行きのフェリーに乗っていた。フェリーは翌朝のかなり早い時間に釜山の港に到着

したが、税関が開くまでの時間は港に停泊したままである。そこで、私たちはデッキに上がり、釜山の町を眺めることにした。これが初めて見る父の国の風景である。平らな屋根の無数の家が山のとっぺんまでびっしり貼り付いているのが印象的だった。

上陸してからのことはうろ覚えだが、税関吏の態度が傲慢で、印象は芳しくなかった。ターミナルを出ようとする、「タクシー」だとか「ホテル」だとかいってグイグイ近づいてくる男たちがいる。西洋人の女性がいて、それに日本人らしき男がくっ付いていれば、これはいいカモに見えたのだろうが、アメリカ人女性も私もなかなかの儉約家で、フェリーだって一番安い席に乗ってきたし、タクシーに乗る気もホテルに泊まる気もない。というより、私たちには韓国人の道案内人がいたのだから、客引きのカモになるような心配はなかったのだが、初めて訪れた韓国に、私はいささか疑心暗鬼になっていたような気がする。

気持ちが少し和らいだのは、ソウル行き的高速バスに乗ってしばらくしてからで、車窓から眺めた韓国南部の田園風景は緑の世界で、太陽が明るく輝いていた。リリアンはそんな風景を見て「スコットランドみたい」という。リリアンは夫のジョージとともに結構世界を歩いてきた人だから、おかしいことを言っていたのではないと思うが、この風景のどこがスコットランドなんだろうと思った。

とはいえ、この風景は私にとっても意外なものだった。私が韓国に期待していたのはもっと暗くて、湿り気のある風景で、それは幼い頃に聞いた父の言葉に影響されたものだった。私が生まれた岩手県和賀郡黒沢尻町（現・北上市）の一角に、和野と呼ばれる地域がある。和野は奥羽山脈に源を発する湧き水の地で、春になると一面に芹田が広がり、小さな水郷のような風景になった。

幼い頃のある日、父がそんな風景を見て、自分の故郷の景色に似ていると言ったことがある。故郷のことなど滅多に口にする事のなかった父のこの一言は印象的で、以来、韓国という国には和野のような風景が広がっているに違いない、という思い込みが生じた。韓国にたいする「古い国」や「貧しい国」のイメージ、あるいはあの時代の岩波書店や朝日新聞が情熱的に喧伝していた「軍事国家」や「独裁国家」のイメージも、その風景を暗いものにするのに加勢してくれた。

だから、私はバスの車窓から見えるこの明るい風景の向こうには、本当は暗い風景が隠されているのではないかと考えたりもしたが、それがイメージとリアリティのズレに由来するのは明らかだった。韓国南東部の田園の風景は、ときに町の風景に交錯しながらも、明るさや軽さの印象を変えることなく慶州まで続き、そこで私は二人の道連れに別れを告げ、バスを降りた。

慶州で降りたのは、その地で会ってくれと言われた人がいたからで、それを頼んだのは密航が見つかり、強制送還されそうになっていた男性で、彼からは母と妹宛にお土産を託されていた。やがて知ったことだが、この男性は唐突に結婚したかに見える日本人夫人とともに、北朝鮮に行ってしまったんだという。平壤では歓迎集会も開かれたんだそうですよ、とそれを知らせてくれた人はいふ。なんというバカな選択をしたんだろうと思った。慶州で会ったあのお母さんや妹さんは、どんなにか悲しんことだろうとも思った。

慶州で二、三泊した後、私はソウルに無事到着。そこで小学六年のときに別れた父にも再会したし、旅の道連れだったリリアンたちにも再開した。不安定なメンタリティの持

ち主だった私の、まだ二十代だった頃の思い出である。

谷崎潤一郎の朝鮮行

1970年代半ばの韓国への旅は、父の国に意外な明るさを発見する旅であり、自分が思い込みの強い人間であることにも気がつく旅であった。個人的体験から始めたが、以後に記すのは、世代的に言えば、私の父母たち、ないしは祖父母たちの体験についてであり、日韓併合期(1910～45)に日本人が隣国でなにを見、なにを感じ、なにを考えていたのかを知るための旅である。

周知のように、戦後の日韓の学会やジャーナリズムには、この時代の日本人の朝鮮体験を扱った膨大な作品がある。だが、その多くは日本の朝鮮に対する加害性の追求を出発点とするものであったから、日本人の多様な朝鮮体験には意外に無関心だったようである。日本人が朝鮮の自然や風景にどのような思いを抱いていたのかを知ることのできる作品が、あまり見当たらないのである。それはしかし、本稿にとっては好都合である。私は未踏の地に行く開拓者気取りで作業を初めればよい。ということで、まずは今から100年ほど前の1918年の秋、雨の多いジメジメした天候の続く日本から釜山の港へやって来た谷崎潤一郎(1886～1965)の紀行文である。

朝鮮に雨が少ないという事は以前から聞いていたので、恐らくこうもあろうと予期してはいたものの、実際予想以上の美しい天気であった。港に着いて、町のうしろに聳えている丘の上を、真白な服を着た朝鮮人が鮮やかな秋の朝の日光にくっきりと照らし出されながら、腰を^{かが}屈めつつ悠々と歩いて行く姿を見た時には、一と晩のうちに自分は幼い子供になってフェアリー・ランドへ連れて来られたのではないかというような心地がした。飽く迄も青く澄んで透き通っている空を眺めると、何だか頭までがすうツと冴え返って、二た晩の間汽車と船とに揺られて来た疲労が^{なごり}名残なく消えてしまった。後で聞いたのであるが朝鮮の秋は一年中で最も景色の好い時だという話であった。恐らくそれは本当であろう。年が年中あんな景色と天気とばかりが続いたら、多分朝鮮は世界一の楽土だろう。

釜山から京城までの汽車の沿道がまた非常に景色がいい。漢江の水は空と同じように透き徹って殆ど翡翠を溶かしたように真青である。ところどころの農家の屋根に干してある唐がらしが日に反射して珊瑚の如く紅く光って居る。いや、実際は珊瑚よりももっとずっと紅く、いかにも人工でてかてか^{みが}と研ぎ立てたように輝いて居る。レールの両側に植わっているアカシヤの並樹、コスモスの花、楊柳の枝、百姓家の土塀、それ等の色彩の冴えざえとした調子は、到底油絵では写すことの出来ない、純然たる日本画の絵の具の色である(「朝鮮雑感」『谷崎潤一郎全集(第六巻)』中央公論新社、2015年、415～416頁、初出『社会及国家』1919年1月号)。

見知らぬ土地への旅は人々を新鮮な驚きに導いてくれるが、それを「フェアリー・ランドへ連れて来られた(略)心地」と表現するのは格別である。京釜鉄道(京城・釜山間)から見える空や川の色を「翡翠を溶かしたように真青」と形容し、沿線の樹木や土塀の色を

「純然たる日本画の絵の具の色」と形容する態度にも驚かされるが、もっと驚かされるのは、その後に出てくる記述であろうか。

平安朝を主材にした物語なり歴史画なりを書こうとする小説家や画家は、参考の為に絵巻物を見るよりも寧ろ朝鮮の京城と平壤とを見ることをすすめたい。京城の光化門通りあたりをさまようていると、嘗て戯曲「鶯姫」を書いた私は、自分があの戯曲中の人物になったような気持を覚える。ゆったりとした白い狩衣^{かりぎぬ}を着て居た平安朝の京都の庶民の風俗と、今の京城の市民の服装とは、その感じに於いて殆ど何等の相違もない。そこにはあの市女笠^{いちめがさ}に似た編笠^{きぬ}を被った男も通る。烏帽子に近い帽子を被った人々も通る。被衣^{かつぎ}に似た衣をすっぽりと被って、衣擦れの音ひそやかに練って行く婦人も通る。そうして、彼等の顔までが絵巻物から抜け出たような円々とした、平べったい、眼の細い、鼻の低いのが非常に多い。夕方になると、鶴^えが五六羽ずつ群を成して町の上を飛び廻ったり、羽ばたきをしながら宵闇^{よいやみ}の往来へ降りて来たりするが、平安朝の京都の町も大方あんな風に鳥が多かったであろうと思う。その外民家の築土の塀なども、平安朝の情景を思い出させるに充分である。殊に、京城の朝鮮料理屋の長春館^{しぎぐさ}へ行った時、例の名物の妓生^{おんどう}が温突^{もろう}の床の上に敷いたわらうだの如き蓆^{さい}に古風なあぐらを掻いて据わって、ねむい慵^{さい}い催馬楽^{さいばら}のような朝鮮の歌を唄い出した折に、私は一層その感を深くした。平安朝の公卿たちの催したうたげというものも、恐らくはこんな風であつたろう、——そう考えると、まずくて幼稚な朝鮮料理までが、その頃の日本料理に似通って居はしまいかというようにさえ感ぜられた。

平壤で朝の市場を通った時に、烏帽子を売る一人の男が沢山の烏帽子を高く高く弓なりに反って居るくらい積み重ねて、それを片手で肩の上に支えながら、人ごみの中を悠々と歩いて来るのを見た。これなんぞは古の光長をして絵巻物の中へ写生して貰いたいくらいに思った。王朝の昔、京都でもこういう風にして烏帽子を売り歩きはしなかったであろうか。頭の上へ瓶だの籠だのを載せて歩いて行く光景も、全く古の販婦^{ひさぎめ}、販男^{ひさぎお}に髻髻たるものである(同上、416～417頁)。

平安朝をテーマにした小説や絵を描こうとするものは、まずは朝鮮の京城と平壤を見るべきと谷崎はいう。平安朝の時代の京都の情景が、今日の京城や平壤には生きているからである。「古風なあぐらを掻いて据わる」妓生の姿とは、立て膝をして座る女性の姿を指しているのだろうが、谷崎の文は、日本の女性もかつてはそんな座り方があったのだということを教えてくれる。

この文を初めて目にしたときには、谷崎潤一郎はやはり個性的な文を書く人なんだと思った。しかしやがてこの時代の日本人旅行者には、朝鮮がしばしば日本の原風景の地として描かれていたことを知る。韓^{から}の地に「内地」の古代性を見出そうとする態度は、あの時代の時代精神の産物であった。

美しい線の国

谷崎の訪韓から9年後の1927年5月、政界入りする直前の鶴見祐輔^{つる みゆうすけ}(1885～1973)が

満洲や朝鮮での講演旅行に出掛ける。鶴見祐輔は官僚出身の政治家であったが、よき文筆家でもあって、このときの朝鮮での体験も「北支の旅」と題する紀行文に記されている。

五月十二日の夜十一時、関釜連絡船は、錨^{いかり}を上げて朝鮮海峡の潮路を分け初めた。一睡すれば、釜山の山影すでに窓に迫る。北行の急行車に登り、展望車の中より旧知の山川を観る。初めて朝鮮に遊んだのは(略)、明治四十四年、私がまだ拓殖局の属官をしていた時である。その時見た朝鮮と、今日見る朝鮮とは全く変わっている。それは朝鮮が変わったというよりも、見る私の眼が変わったのである。

私は朝鮮に遊んで、いつも一番深い印象を受けるのは、ポプラの樹である。ポプラを中心として、誰かに朝鮮の風趣を描いては貰えまいか。南ロシアのウクライナは、詩情ある地方である。そのウクライナの人々はポプラの樹を愛すること、世の常に越え、美人を形容して、彼女はポプラの如く美しいというそうである。

新緑の山河は、どこの国でも美しい。南朝鮮の河は水流満々、岸と共に平らかに、身のすでに亜細亜大陸の一角にあるを覚えしめる。ただ四辺に点在する朝鮮家屋が、旧態依然として藁葺^{わらぶき}屋根であるのが、遊子の胸臆^{むねおく}に一味の哀愁を誘う。二時ごろ、車は秋風嶺[忠清北道永同郡]を過ぎる。何というよい名の町だ。左右は高き山々、山の下に青田、処々疎林を見る。眼にしみるような新緑と、黒い裾に白の上衣、髪を奈良朝風につかねた朝鮮の乙女が、丘の上の細絛を歩んで来る。高くして真直ぐなるポプラの樹の葉が、ひらひらと風に裏返っている。

大田を過ぎて初めて、朝鮮民家のうちに、トタン屋根の家を見る。制帽を被った朝鮮の子供三人来る。こうして、少しずつこの国が変わってゆくのだ。

成歙[現在の忠清南道天安市]をすぎて曇り、餅店[原文には米店とある]より細雨、水原に到りて雨上がりの松林滴るとき翠色。水田のうちに、白い鶴の立てるを見る。薄暮、京城に入れば、満街すでに燈光明し。車を駆って町をゆくと黄昏の空に美しき王城の樓門が聳えている。遊子は京城に到りつきて、古今千年の歴史を懷^{きーざん}う。

その夜、新知旧友に招かれて、生れて初めて朝鮮料理を喫し、名物の妓生^{きーざん}を見る。食堂園という旗亭。待合室に入れば、十二畳ほどの部屋。天井高きこと九尺、床下はオンドル、薄褐色のしき物の上に、萌黄緑の席をしく。色調の既に異なるを見る。色どり濃き屏風を引き廻し、周囲を浅黄に中央を緋にしたる座布団をしき、その正面を主賓の席とし、主賓の座にのみ左右兩個の枕様の萌黄の肘つきあり。この坐に直って一座を見渡す心持は、猿芝居のお大名もかくやあらんと思わる。

妓生^{きーざん}の名、曰く、金蘭珠、曰く鄭玉蘭、曰く金山月、何ぞ詩情に富めるや。一人は白^{しや}の紗^{うわぎぬ}の上衣、桔梗^{ききよう}模様を織り出したる同じく白羽二重^{したた}の裾、滴るごとく黒き髪を朝鮮髷^{まげ}にして赤の手がらに、翡翠と白金の釵^{かんざし}。一人は紅の紗に紺の袖口。薄水色の羽二重の裾、静肅として情趣あり。今まで路上の朝鮮の婦人のみを見たる眼には意外の感なき能わず。

食事は、今は次第に本来の朝鮮料理より、次第に転化して、日本人の好尚^{こうしょう}を加えつつありという。生栗、松の実、もちごめに朝鮮の気分がある。寄せ鍋のごときを名づけて、神仙爐とは、流石に文字の国である。食事半にして妓生鼓^{きーざん}を打って筏流しの歌を歌う。哀音切々、人の胸に迫る。正直に白状して、私は支那の芸妓^{やすり}の鑵^かの目をたて

るような胡弓の音には感服しない。朝鮮の音楽は遥かにいい（鶴見祐輔「北支の旅」『中道を歩む心・新自由主義論』大日本雄弁会講談社、1927年、409～412頁）。

これは読者をウキウキした気分にさせてくれるような文である。谷崎が「まずくて幼稚」といった朝鮮料理も楽しんだ風である。こんな文を読むと、自分も韓国に行つて（本稿では日韓併合期の「朝鮮」を「韓国」とも表記する）、その風景の一部になってみたいという気分になる。鶴見が児童用に記した『日本と世界』（アルス、1929年）によると、旧制中学（岡山中学）のときに『スタンレー探検記』を読み、それから「世界の大きな舞台に出て、為事をするような偉い人間になりたい」という気持ちを抱くようになり、そのために努力したのだという。「新緑の山河は、どこの国でも美しい」の文は、世界を旅し、その自然や人間に親しんだ、この人ならではの感慨であつたのだろう。

1910年代と20年代に記された二つのエッセイを紹介したが、ここに記されているような韓国の風景についての記述が、戦後の日本の韓国論には少なかったのではないかという気がする。日本における韓国論は60～70年代の政治的韓国論に始まり、80年代半ば以後には文化的韓国論が多く出てくるが、風景というだけではなく、韓国の自然に関心を寄せる読み物に出逢った記憶があまりない。70年代半ばの韓国訪問でその風景に思い違いをしていたのは勉強不足のためであつたかもしれないが、そもそもあの時代には韓国の風景であるとか樹木について教えてくれる読み物が、ほとんどなかったのである。

改めて鶴見祐輔の文に戻る。京城に到着した鶴見は朝鮮料理を口にし、「妓生を見る」とある。妓生（キーセン）に妓生（キーセン）とルビを打つのはあの時代の習慣だった。「今まで路上の朝鮮の婦人のみを見たる眼には意外の感なき能わず」の文は納得できる。あの時代、両班（ヤンバン）の女たちが外出するときには顔を被っていたから、路上で婦人たちを見かけても、その顔や表情をしかと観察することはできなかったのである。

先に韓国の咸錫憲に触れて、韓国には珍しいクエーカーであると記したが、鶴見もその晩年、日本では珍しいクエーカーとなった。告別礼拝式が東京港区にある普連土（ふれんど）学園で行われたのはそのため、そのことをクエーカーの小さな日曜日の集会で、娘の鶴見和子から聞いた。鶴見祐輔のことは知らなくても、その子である和子や俊輔を知る人は多いであろう。鶴見和子の母の愛子は後藤新平の娘であり、その後藤の岩手県水沢時代からの友人であつた斎藤実（さいとうまこと）（1858～1936）が当時の朝鮮総督であつたのだから、会おうと思えば会えたに違いないが、「北支の旅」にその記述はない。京城に二日ほど滞在した鶴見祐輔は、北朝鮮を経由して満州に向かうが、北朝鮮についての記述も鮮やかである。

翌日は講演に一日を消し、翌々朝この旧都を去って満洲に向かう。京城より北の方、三十分にして水色駅というに至る。山青く田広く水清し。水色とはよき名かな。かかる名前をつけた当時の朝鮮人の心意気が偲ばれる。南朝鮮と較べて、北朝鮮の風光は異なる。遥か彼方に、天の遮る高い峰巒（さへき）の姿が、日本と別乾坤の感を与える。それは高く険しくして、しかも荒々しくない。たとえばカナダのロッキー山と比して、何となく北朝鮮の山容には優し味がある。それは朝鮮が細い美しい線の国であるからだ。丁度、英国から海峡を渡って、フランスに上陸した瞬間に、我々は別天地という感じを受ける。同じように我々は、満洲から往つても、日本から往つても、朝鮮に到つて別山河と

いう感に打たれる。それはフランスの場合と似ている。英国の櫟^{かし}の樹を見たあとで、フランスの街路樹を見ると、我々はフランスは美しい曲線の国だという感に打たれる。朝鮮に到って、我々は少しく異なる意味において、美しい線の国だという感じがする。フランスの線のごとく、美しい曲線ではない。しかし朝鮮の線は、直線であるが、美しく細く軽い。ポプラの樹においても、高い峰々においても、半空に峙つ王城の楼門においても、我々はこれを観取する、感得する、否、呼吸する。

日本のごとき雨の国においては、線は美しく煙り、支那のごとき歴大なる平原においては、線は大地に吸い込まれている。ひとり朝鮮^{フオーム}において、優しく存在する。英国の陶器鑑賞家のリーチ〔バーナード・リーチ〕が、支那「形」、朝鮮は「線」、日本は「色」といったのは流石に一隻眼であったと驚かされる。

北朝鮮の停車場を美しく飾^するのは、松杉である。幹は落葉樹に似たれども、葉、密生して、軟^しかい細葉風を梳くごとき味わいは、スペインのサン・セバスチアンの豪州松の優しさを偲^{しの}ばしめる。ただその葉、豪州松のごとく長からざるを憾む。

土の色、赤煉瓦ほど赤き上に、三寸より五寸ほどの青い麦の芽の伸びたのは美しいものだ。ただ例の朝鮮鴉^{からす}〔カササギを指す〕という奴、無遠慮に樹間に部細工な巣を作っているのは、不届きと言うべし（同上、412～413頁）。

鶴見のいう「美しい線の国」とは、英国人陶芸家^{やなぎむねよし}で柳宗悦ら民芸運動家たちと近い関係にあったバーナード・リーチ（Bernard Leach 1887～1979）の三国論、つまり「形の国」（中国）、「線の国」（朝鮮）、「色の国」（日本）の「線の国」論を援用したものであろう。ただし、ここで注目したいのはその日本から朝鮮への移動がもたらす変化を英仏間のそれに似ているとした部分で、似たような体験を1972年12月、韓国の農村調査のために羽田を発ち、ソウルの金浦空港に到着した中根千枝（文化人類学者）は「タラップを降りるとヒヤリとする冷たい空気が肌を刺す。この澄んだ冷たさに大陸に來たという感慨が一入沸く。ロンドンからパリーに着いたときの感じに驚くほど似ている」（『韓国農村の家族と祭儀』東京大学出版会、1973年、183～184頁）と記している。

中根が「ヒヤリとする冷たい空気」に触れたのに対し、鶴見は「別山河」の発見を記し、そこに「美しい線の国」を見出したという。鶴見より中根の方が肝心なことに言及していると思うが、北と南の風光の違いを記して「遙か彼方に、天の遮る高い峰巒^{さへぎ ほうらん}の姿が、日本と別乾坤の感を与える」の記述は鮮やかである。そういえば、戦後の日本には朝鮮半島の南北の風景にある違いを教えてくれる文も、あまりなかったような気がする。

禿山の国

谷崎潤一郎の文も鶴見祐輔の文も好奇心に溢れていて、読んでいて心地良い。これはしかし当時の日本人の朝鮮風景論としては、やや例外的なものだったろう。当時の半島と列島の間には、今日のそれとは比べものに異質性があり、異質性はむしろ、馴染みにくさの感覚となり、それは蔑視や軽視の態度に導かれやすいものであったからである。

実際にあの時代に朝鮮旅行者が残した文献などを少し読み始めてみれば直に気がつくことだが、この時代の朝鮮の風景でよく話題にされていたのは禿山^{はげ}のことである。日本が

韓国に併合される以前の数年間を大韓帝国の時代(1897～1910)というが、その時代に京城、仁川、木浦、釜山等で伝道視察旅行を行った日本基督教会の貴山幸次郎(1865～1940)は、その見聞記で次のようにいう。

韓国に至りて先ず目に着くのは、多くの禿山と荒原である。若し是に十分植林をなし又開墾をなさば、ドレ丈^{だけ}の富源を得るか知れぬ。山も原も決して地味は悪くないということである。今の儘^{まま}に放任して置くは甚だ惜しきことである。

尚一千万の人を容れるべき余地あり。地図で見ると朝鮮は日本の北海道四国九州を除いた本州程ある。しかして人口は統計表がないから分からぬが、先ず一千万人には越えまいという。して見ると、尚^{なお}少なくとも一千万人は移住し得るの余地^{たし}が慥かにある。しかるに我国にては毎年四五十万人^{ずつ}も繁殖増加すると云えば、余は神が我国民の膨張発展するハケ場に朝鮮を備え置き玉うたものと信ずる。遠く布哇メキシコ等に移住するのも悪くはあるまいが、東洋百年の大計より考うるも、土地氣候風俗の相近似せる朝鮮に移住植民を企てるは、尤も適当必要のことと思う(貴山南海生「朝鮮見聞録」『福音新報』1903年12月17日、442号、小川圭治・池明観編『日韓キリスト教関係史資料』新教出版社、1984年所収、47頁)。

貴山はハワイやメキシコに移住するより朝鮮に移住せよというが、三年後の1906年、衆議院議員の荒川五郎(1865～1944)は朝鮮への移住を考え、また朝鮮を知ろうとする者のために著したという著書で、次のようにいう。

山高きが尊^{たつと}からずで、朝鮮の山という山は殆ど禿山であるから、朝鮮に山なしと言うても差し支えなかるう(略)。

伐^きっては遣い、取^{つか}っては焚き、そうしていかに禿げようが、どうしようが構わず、植林など更に考えるどころか我一がちに互いに競^{きそ}うて伐り取りて顧みなかったものであるから、それで遂に今日のような哀れな有様を呈するに至る。従って川にも影響してきた次第であろうと思われる。

しかしこれは朝鮮ばかり笑われた義理ではない。日本も近頃非常に無茶伐りに山を伐り、林をたやすことが盛んであって、一時は到る所禿山が沢山あったのを、幸いに近頃気がついて植林ということが広まって来たのであるが、もと山というものは取るばかりで、そだてるといふ考えはなかった。そこで世間の諺にも跡は野となれ山となれということもあるが、決して山や野はそういう訳のものではない。

悲しいことには朝鮮人にはマダその気がつかないから斯様^{かよう}山々が皆禿げておるのであろう。そこで一度大雨があると、水源を保たないから川水はすぐ氾濫して、濁流滔々^{とうとう}と田園を害するのである。(略)

もしも日本の力で朝鮮の山を作り、朝鮮の川を作ったなら、そこで田園も出来れば財産も確実になって来る。従って村も出来れば家も出来る、国も富む、朝鮮も出来る、そうなれば朝鮮は日本が拵^{こしら}えたので、朝鮮は日本のものである。

しかし全く朝鮮に山がない訳ではない。即ち禿山のみではないことは水原駅に着いてこれを知ることができる。水原府の殖林や灌漑のことなど既に説いた通りで、水原

府の西北城壁上にある訪花隋柳亭に上がって眺むれば、ツイ前の八達山は勿論、見渡す限り起伏しておる山や丘が皆松樹などに被れておるのであるから、禿山ばかり見て来た目には、初めて山を見るという感がある。

かく南部は水原地方を除いて殆ど禿山であるが、しかし此方^{こちら}に進むと所々の山々、皆良材に適する樹木が茂っておる。その中で著名なものを挙げて見れば、咸鏡道の白頭山が第一高いので、同じく五峰山も高く平安道の狼林山、天摩山、延平山、黄海道の高達山^あ、首陽山^{いとま}、慶尚道の鳥嶺山、太白山、小白山、忠清道の五剛山、鉄嶺等、その他一々掲ぐる違はない。

朝鮮の山勢は満洲境にある国中第一の高山である白頭山の山脈が東海岸を沿うて遠く南の方に走り、その末端が済州島にある漢拏山となるので、その間、連山^{きふく}起伏し、またこの山脈から岐れて、その岐脈が全国に及べど、西南部に至っては平原地が少なくない(荒川五郎『最近朝鮮事情』清水書店、1906年、35～37頁)。

やや語り口を異にする禿山論もある。日韓併合直前の1909年、韓国での伝道旅行を終えたメソジスト派の牧師・古坂啓之助(1859～1935)は次のようにいう。

朝鮮の風土朝鮮の地も山も皆雄大である。山嶽^{さんかく}は大概、禿山であるが、地味荒廃して樹木生ぜざるにあらず、愚昧の臣民、時の政府に反抗^{ことごと}して悉く截断^{しも}して了うたのである。故に燃料物に欠乏すること甚だしく、常用の木炭は木の根っこより造っておる。現今は植林の事業も、ポチポチ興^{おこ}されおれば、近き将来には樹木鬱蒼たる山嶽を見るに至るであろう。唯に土壤及び山嶽のみ雄大であるのみならず、河川もまた雄大である。大陸的である。その流域広大にして観るだに愉快に感ぜられる次第である。

雄大なる土壤は不毛の地の如くに人々が思うが、決してそうでない。韓人はこれを耕すに牛を使用しておる。力を致せば収穫も多かろうと考えるが、彼らが耕作術は極めて幼稚にしてお粗末である。故に収穫も少額である。それで農事の改良をこれに加えれば、前途有望の土地となるであろう。

全国の気風は単調にして万事万般は一律である。都も鄙も皆この定規で律することが出来る。然し天より蘇りの力を授かり、これに適当なる人工を添えるならば、一大強国たることは疑うべからざる所である。人工的改良を加うべき焦眉の問題は二つある。一は道路の改修、一は治水である(藤岡潔著「古坂部長の朝鮮視察談」『護教』1909年9月25日、948号、『日韓キリスト教関係史資料』100～101頁)。

やや語り口を異にしてはいても、禿山に対する否定的な眺めに変わりがあるわけではない。それは不毛や貧しさや荒廃のイメージとともに語られているのである。語り口をはっきり異にするのは、地方行政等の視察のために朝鮮を訪問した法制局参事官原象一郎が記した『朝鮮の旅』の記述だろうか。1914年8月19日の夕暮時、慶尚北道の仏国寺に向かう路で見た禿山の風景を、原は次のように記している。

仏国寺の旅は寺や仏許^{あさ}を漁る趣旨ではない。この真に日本的空気と隔絶した朝鮮の田舎の空気を吸い度いと謂う志である。夕日の影は情なくとも晩風涼味^{ばんふうりょうみ}双の袂^{たもと}に溢る

る程に無鉄砲に走る朝鮮人の車は赤砂に清き水少し許流れる兄山江と謂う河の沿うて蒼田の中を行く。この道は慶州から蔚山へ通ずる街道であって豊太閣の朝鮮征伐の頃には釜山鎮から京城へ通ずる本道であつたらしい。歴史の影の濃やかな道である。東西共に蜿蜒たる連山に縁どられて幅二里の野は慶州より蔚山迄続いて居る。この野を貫く道を拙者は行く。天地の気色は丸で今迄とは別様の趣である。荒洪の気が山河を籠めて居る。西方に屏風を立てた様な南山の流脈は更に高く又更に赤く(略)髪を重ねて禿げて居る。如何にしてこれに木を樹うことが出来るか。かかる野山に抑も植林などと謂うことが為し得らるるものであろうか。田舎へ這入れればこの様な真赤な山は到る所に在ると謂う。鉄道沿線のみを見て、乃至は総督府の統計のみを見て朝鮮の山は大部分に青いと思う者があればそれは非常な早計であると謂う様な感じがする。併し一々朝鮮の禿山を調べて歩いた訳ではないから事實は知らぬが兎も角もこの辺の山は非常な禿げ方である。序に謂うが総督府の統計に依ると朝鮮の林野の総面積は壹千六百万町歩でその中七割七分は成林地又は稚樹発生地であって木の無い面積は僅かに二割三分に過ぎぬ。結構な統計である。二里程も蔚山街道を東西の方へ進むと仏国寺の路は本道から岐れて東の方へ山に沿うて這入る。それからはこの東方の山脈の禿げ方は又向こう側の南山山脈の禿げ方の比ではない。南山の方は禿げたと形容すれば概念を得ることが出来るけれどもこれは山一体に所々の岩石を残して赤き砂が(略)流れて居るのである。禿げたのではない。山それ自体が赤砂の流れである。それが押し出して川に為って居る所などは実に荒涼たる景色である。水は少しもなくて而も川底が往来や田畝よりも遥かに高い。渺茫として所々に立つ岩石の根を侵して赤い砂の広き流が俵から米を開けた様に押し漲って居る。朝鮮では山と河との区別がない。山が本店で河が出店であると謂う觀念は最も能くこの死せるが如き赤き山と赤き川とに依って表明せられて居る。其所へ今や南山の端に隠れむとする夕陽の脚が烈々として打突かる。赤い赤い誠に赤い。山も川も路の野も燃ゆるのではなからうかと思われる。而して人間の気配と謂うものが殆どない。自然のみの天地である。而もその自然が又最も赤裸々たる天地の骨である。一度栄えし亡国の山河と称するよりも原始の国の面影ではなからうか(原象一郎『朝鮮の旅』巖松堂書店、1917年、474～476頁)。

旅日記風に記されているこの紀行文、日々の記述が相当な量で、煩雑な印象を与える部分もあるが、原象一郎という人、よき観察眼と批判精神の持ち主だったようで読み応えある記述がいくつもある。原の朝鮮旅行から4年半ほどが経過した1919年3月、韓国では35年間の日本統治中、ほぼ唯一、全国的といえる反日運動が起きる。三・一運動のことであるが、その直後に朝鮮総督府警務局長に就任するため朝鮮に赴いた丸山鶴吉(1883～1956)は、赴任途上に見た「荒涼たる山河」の風景に自らの使命を知ると記している。

汽車は進みました。そして急行列車の車窓から、朝鮮の山川風物を物珍しげに眺め入りました。行く手も行く手も禿げたるその山、涸れたるその河を見せつけられます。千里荒涼の感を抱いたものは私許りではなかったらうと思います。朝鮮に来てこの荒涼たる山河のたたずまいを見て、失望落胆する人も少なくはありますまい。ささやかながら私どもは朝鮮統治の局に当たる一手足として、今赴任の途中である。この荒涼た

る山河を見るにつけて感慨無量でなければならない。あの山の禿げたる如く、あの河の涸れたる如く朝鮮の民心は荒廃しているのではあるまいか。十年苦心経営の結果は禿げた山の谷に苗樹こうもんの植林を見ることの出来る、所々に砂防の工事の跡を確かめることが出来る、所々に閘門が出来たり、堤防の新築せられた河川を見ることが出来る、この山とこの河に手入れが届きつつあるだけ、朝鮮の民業の開拓が出来つつあるのであると思われてならない。朝鮮になすべき仕事、施すべき施設の多いことは想像して来たのであるが、この荒れたる山を見、あの壊れたる河を見るにつけ更に一層将来なすべき事、施さざるべからざる事の山の如く海の如く、広大無辺なる想い、男子の本懐これに過ぐるなしと、独り微笑を禁ずる能わざるものがあつたのであります（「吾輩の覚悟を表明す」『在鮮四年有余半』松山房、1924年、121～122頁。1921年9月記）。

明くる1920年5月、南満州鉄道の幹旋で日本図書館協会の大会に招かれた歴史学者の喜田貞吉きたださきち（1871～1939）は、往復20日間の「鮮満」の旅の5月23日の日誌に次のように記している。

船の中で税関のお役人のお調べがある。罐詰を沢山持って居た人がむつかしく推問すいもんされる。朝鮮の親類への手土産だということで無事にすんだ。お役人の手伝をする少年の不愛想なこと夥しい。夜が明けた。朝鮮の島々が見える。名物の裸山もだんだん青味がついて来た。全く韓国併合のお蔭だ。多年旧政府下の悪政に苦しみ抜いて居た民衆も、この裸山同様に新政の恵に浴して、おいおい生気が恢復して来る事であろう。

わが古伝説『日本書紀』第四の一書に曰く。素戔鳴尊すさのおのみことしらぎ新羅みこがみにあつてその御子神たちに樹種を持たせ、筑紫から始めて我が各地に植えしめ給い、その御子神たちはついに紀伊の国に鎮まり給うたと。これは紀伊の国がもと木の国だということを説明すべき一の地名伝説たるに過ぎぬが、それにしてもその樹種を朝鮮から持って来られたという伝説の出来たのは、この地が太古樹木鬱蒼の域であつた事を示したものだと言わねばならぬ。然るにも拘わらず、近代の朝鮮は見渡す限り満山丸裸であつた。十六年前旅順戦績見学に行った時に、同じ様に船から見た朝鮮の島々には、木と名の付く程のものが殆どなかった。対馬や壱岐の青々とした山を見た目でこれを見ると、僅かに一衣帯水を渡っただけでも、成る程これは異なった国へ来たのであるということを直感せしめたものであつたが、今日ではそれが今は幾らか青味を帯びて居るのが嬉しい。

我等は生れ落ちるときから山は青いものだと言われて居る。人間至る処青山ありなどと云って強がったものであつた。然るにこうしやざん赭山ばかりの朝鮮では、男子志を立てて郷関いを出づと気張って見ても一向映りがよろしくない。しかもこの赭山はうぶからのものではなく、目前の薪材を得るに急にして後の事を慮るに遑いとまのない連中が、根こそぎ掘って温突おんどくに投げ込んだ結果だと聞いては驚かざるを得ぬ。濫伐の結果は土までも流してしまつて、山骨ことごと悉く露出するの現状となり、洪水氾濫して良田も忽ち砂礫されきの原となる。恐ろしいことだ。ある人は温突亡国論を唱えた。温突は朝鮮に於ける唯一の防寒設備だ。これあるが為にあの冬の寒い国で、あの不完全な住宅で、民衆は安々その嚴冬を越す事が出来るのだ。温突の発明者はどの位一般民衆に幸福を与えて居るかも知れぬ。而もこれあるが為に山は裸になってしまった。その幣の及ぶ所実に夥しいもので

ある（『庚申鮮満旅行日誌』『民族と歴史』第六巻第一号、1921年7月1日発行）。

さらに10年後の1930年、日本における射撃競技の創始者であり、スポーツ評論家や新聞記者でもあった師尾源蔵（1897～1961）は、慶尚北道のどこかの町で内地人の物知り^{もろ おげんぞう}と禿山について語るが、その会話は禿山のテーマがどんなトピックとの組み合わせで語られるものであるかを教えてくれる。

「先生何を考えこんでおられるんですか」

と臨席のG氏がさし出したシトロンのカップをものもいわずに飲みほしながら、

△「山に木なく、川に堤防なしという形容詞は本当なんですね。赤剥げ^{あか は}の特長など自慢にはなりませんや。日本内地の山紫水明は、海外に出て始めてわかりましたよ」

G「朝鮮は恵まれておらぬ土地であります。赤い土は朝鮮の農業的生産力が乏しい証拠です」

△「私の直感ですが、朝鮮の山河はひからびた土地、乾いた土地とでもいうんでしょうか。内地はうるおいある、湿っぽたい土地……」

G「昔から濫伐で人民の樵伐を許して、植林など顧みなかったんです。政治が悪かったもんだから、手がそこまで届かなかったのでしょう。それにあの温突^{あかつち}の燃料で、住民が草の根まで掻きむしって、やっと冬の温度をとるんですから赭土^{あかつち}がいつまでも赭土に終わるんです。それは枯葉等がつもって有機的肥料が土壌に加えられぬため、黒土となることが出来ないんですね。お蔭で雨が降れば洪水です。雨水の落着き場が、山にも野にもありませんから。一時に里に押し出してくるわけです」

△「珍しい鳥が沢山おりますね。あれは何ですか」

G「朝鮮鳥^{ちようせんからす}ですか。あれは内地の鶺鴒^{かささぎ}のことです」

△「いや私どもは、あんな鳥は珍しいですね。あいつの泣声はやっぱり鳥と同じようじゃありませんか。しかし鳥よりは体が細くて小さいし、背筋が白いようですね」

G「けれどもあなた、朝鮮はこれで近年余程山に緑が見られるようになったんです。日本の保護国時代から、造林事業が奨励されて、森林令だの、模範造林だの、また一般的に種苗の無償下付等が行われたんです。水田の中に感心にも、ほら！ 樹木がちょろちょろ生えておりましたが。あれは皆墓地^{さすが}でして、流石朝鮮は儒教の国ですから、どんな水呑み百姓でも、祖先の墓場の木はむしりません」

△「あの屋根が赤くなっておるのは何ですか」

G「ははあ……あれは唐辛子をほしているんですよ。朝鮮人は何でも辛いものが好きですから」(師尾源蔵『新朝鮮風土記』萬里閣書房、1930年、78～80頁)。

金剛山

とはいえ、韓国の山がいつも禿山としてばかり語られていたわけではない。朝鮮の山河への眺めといっても、本稿のそれは河川より山の方に偏っているが、この時代の山河論のもう一つの軸は岩山論であり、それは旅行者たちよりは居住者たちに語られることが多かった。ということで、ここからは基本的には居住者たちの山河論に関心をシフトしたい。

花崗岩の岩肌が剥き出しになった山が朝鮮には随所にある。とはいえ、山河の風景は、居住者たちにとってはもはや見慣れたものであるから、旅人たちのように、それに新鮮な驚きを表出するという事は少なくなるかもしれないが、それでもそこには居住者ならではの眺めがあり、発見があったはずである。

本間九介著『朝鮮雑記』は日清戦争直前の1894年4月17日から6月16日にかけて『二六新報』(明治から昭和にかけて発行された日刊紙)に掲載された連載が後に単行本化したものである。近年、クリストファー・W・A・スピルマン(1951年生)の解説付きで復刻版が刊行されているから、この時代の作品にしては比較的知られていると思うが、その「草木」の項にはまずは食べる「草木や葉」の話があり、次いで樹木や山の話が出てくる。復刻版の記述、そのままの引用である。

飢饉凶年に対処するための活きた学問を学ぼうとすれば、朝鮮へ赴くのがよい。野外にある草木や葉は、その大半が膳羞に上る(食べられる)。杏、梨、百日紅、黄梅、桃花などがあるが、桜花や梅花はない。

かの国には、杉材もない。最も多いのは、松と樅である。山林は開墾されず、咸鏡・平安の両道で、少しの松樹の連山を見るだけである。

かの国の人は、美術的情緒を欠くため、全国のどこにも、庭園などは見られない。

しかし、山岳重疊、兀突としてその骨を露わし(山々は重なり、ごつごつとして)春水漲淼、輕風細漣を起こす(春の河の水が漫々と広がり、ささやかな風が小さな波を立てる)とき、微吟緩節(小声で歌い、ゆるやかに節をとり)、詩中の人となって、みずから画図の中に配す(山水画の中の主人公となる)。これは、わが国にいては得ることのできない快楽であろう(本間九介『朝鮮雑記——日本人が見た1894年の李氏朝鮮』祥伝社、2016年、283～284頁)。

前半にある植物論の記述は今でも概ね古びていない。今日では栽培されることが多いとしても、「野外にある草木や葉」が韓国人の食膳に上がるという風景は、今日でも見てとれることであり、松の木は多いが、杉の木が少ないとか、梅の木が朝鮮に少ないという特徴もその通りである。ただし桜の木が今日の韓国に珍しくないのは日本統治期にもたらされた変化によるもので、この国の草木や山岳のエコロジーは日本統治期に大きな変化を経験しているのである。

次いで語られる山河論にある「山岳重疊、兀突としてその骨を露わし」という記述は、岩肌が剥き出しになった「岩山」の形状を指すものである。「岩山」の系譜で語られる山河論に特徴的なのは、それが驚きや賞賛の態度とともに語られるということで、代表的なのは奇岩連なる金剛山であろう。

泉靖一(1915～1970)は12歳のとき、父の泉哲(1873～1943)が京城帝国大学の法文学部教授に就任したのに伴い、京城に転居。翌年中学に入学するが、軽い肺浸潤を患う。その病氣療養を兼ねて家族は内金剛、長安寺のバンガローで夏を過ごす。そのときの体験を後年、泉は「遙かな山々」というエッセイに記している。岩山をテーマにしたというより長安寺のバンガローを拠点に金剛山の自然に触れながら山歩きに魅せられていく経緯を記した文であるが、この時代の金剛山の風景をこれほど生き生きと記述した

例を知らない。

一九二九、三〇年のふた夏を、私は父のはからいで、長安寺のバンガロー(貸し別荘)ですごした。日本から朝鮮に赴いたものが、しばしばおかされたように、私も京城で中学に入学すると、軽い肺浸潤をわずらった。休学はしなかったが、夏を空気のいい長安寺でおくらせてやろうというのが、父の考えで、七月二六、七日になると、一家全部で京城から長安寺にむかった。

京城から鉄原まで鉄道に乗り、ここで金剛山鉄道に乗りかえた。当時の電鉄の終点は昌道で、そこから長安寺まではタクシーによらなければならなかった。重畳たる山脈を、登っては降り、^{くだ}降っては登って、長安寺に着くのに半日以上かかった。長安寺一帯は、深い針葉樹林に覆われていて、そこには鉄道局直営の朝鮮ホテルの分館と、おなじホテルが経営するバンガローがあり、民間の人々の経営する旅館は、みすぼらしく、その数もわずかであったし、店というべきものもほとんどなかったように記憶している。そのせいか、私たちは、京城から大量の食料品、それに食器や炊事道具まで持参した。

京城の町と、その周囲の海岸しか知らなかった私にとって、長安寺の自然はきわだって鮮やかであった。はじめの年は、ミンミン蟬のなき声が膚にしみて、めずらしかった。長安寺の僧侶の読経におどろき、^{せいれつ}清冽な小川のせせらぎに耳を傾けた。寺のはずれからの内金剛の中心部にむかって、小さな路が沢ぞいに続いていた。弟妹たちとこの小路をいくたびか登ったが、登れば登るほど大きな一枚岩や滝があらわれてきて、自然は天上からおそいかかってくるかのように思われた。とくに、谷のうえの青空に白い雲がとびかうのを見ると、天と雲とが落ちてきそうな幻覚にとらわれた。そのようなときには、私は弟妹たちをつれて、いちもくさんに、バンガローに逃げ帰ったことを思いだす。

さびしい内金剛の山路で出会う人々は、たいてい青い目の外国人だけで、朝鮮人も日本人も僧侶をのぞくとわずかであった。また、たまに会う朝鮮人と日本人は例外なしに団体客であって、少人数の^{たむろ}旅行者にはほとんど会わなかった。そのころの金剛山は、朝鮮や日本よりも、東洋に屯している外国人に有名であった。バンガローの隣人たちもホテルに泊まっていた客も、たいていは外国人で、上海や香港からの夏の休みを涼しいところですよすためにきた人々であった。長安寺の涼しい夏をのんびり過ごすことのできる経済的余裕がある人が、まだ朝鮮人にも日本人にも少なかったのと、余裕のある人々にも心のゆとりがなかったのである。(略)

父は毎日木陰で書物を読み、子どもたちは蟬をとったり、谷々を歩いたり、昼弁当を野外でひらいたりしたが、あまり山の奥にははいってゆかなかった。そうこうしているあいだに、一九二九年の夏休みも終わり、一家は京城に帰ってきた。秋がきて、冬にはいると、私たちはいつのまにか、次の夏を待つようになった。

中学二年の冬には、家の付近の熨忠壇の池で、スケートを習った。硬い氷の上を、鉄の棒を足につけて滑ることは、容易な業ではなく、ようやく滑れるようにはなったが、ついに好きにはなれなかった。それでも熨忠壇から漢江にまで足をのばして、滑るだけは滑った。一九三〇年の夏がくるまでに、私の健康はめきめき回復して、手足

が大きくなったように思われる。

夏休みがはじまると、一家はすぐまた内金剛の長安寺のバンガローにおもむくことになったが、(略)私はもう蝶やトンボを追うのを止めて、山を歩きはじめた。あらかじめ用意してきた細い縄を腰にさげて、付近の岩の峰に登ろうとしたのである。花崗岩の一枚岩の多い金剛山の峰々は、のちにも述べるように、岩登りのすばらしいゲレンデであった。

七月のある日、私のからだをずっとみてもらっていた医師の三木先生が、バンガローをたずねてきて、数日泊まった。ちょうどその時、ホテルの支配人の弟の伊藤さんも、長安寺にきていて、どんなきっかけからか知らないが、三木先生と意気投合し、内金剛のうちでももっともけわしい望軍台という山に登る計画が、夕食の話題にでたのである。私はぜひ、同行させてもらいたいと申しでたところ、まだからだがかんとうに治っていないからと、母が反対した。その時三木先生が大丈夫だと思うから、試験的に登らせてみようといってくれたので、主治医がいわれるのだからと許可がおりた。

長安寺から望軍台への路は、そのころは、まだ踏みあと程度で、落ち葉が深く吹きだまり、歩くと膝がすっぽり埋まるようなところもあった。溪谷の水は清冽で、いたるところに小さい滝がかかっている。川を遡っている路のところどころに丸木橋がつくられていたが、大部分は朽ちはたてていて危険であった。小さな谷や崖の上に結ばれた庵におもむくために枝道がたくさんあったが、みちしるべのようなものは少なく、私たちはなんかいも迷った。

望軍台の登りは、頂に近づくにしたがって、急にけわしくなった。とくに頂上のすぐ下の岩壁には、上から太い、鉄の鎖がさげられている。その鎖にすがって、小さな岩峰の頂上に立った。私だけが、頂上の下ですっかりのびてしまい、水筒の水をがぶがぶ飲んだ。二人の大人は、さっさと、私をおいてとおりました。なにくそと、走るように二人を追いかけたことを、いまでも覚えている。庵に住んでいる僧侶をのぞくと、この日はだれにも会わなかった。

望軍台は、けわしい山だが、眺望はさほど秀れていない。さらに高い峰が、北のほうに聳えていたからである。望軍台に登って自信をつけた私は、この峰の北に走っている金剛山中の最高峰である毘盧峰〔標高1,638m〕に登りたくなった。この峰は、そのうち外金剛のほうからも登れるようになったが、当時は長安寺の頂上まで小路がついていただけである。

内金剛の主体をなす溪谷は毘盧峰に源を発して、長安寺の流れをくだってくる。だから、この溪谷を遡行して、毘盧峰の頂上に達するコースは、古くから内金剛の幹線であった。したがって路も、望軍台よりはよほど立派である。私は、毘盧峰には、伊藤さんと登ることにした。

昨年、雲がまいおりてくるのにおどろいて、妹や弟をつれて逃げ帰った峡谷の入り口を、朝暗いうちにとおりすぎた。一年間で、これほどまでにたくましくなったことが、不思議に思われてならない。少し前に、観光客が長安寺の宿をでていたが、私たちは気楽に、この人々を追いかけて、四時間後には毘盧峰の麓のガレ場の下にきていた。このあたりに、四仙橋茶屋がある。茶屋から樺の林をすこし登ると、森林がなくなって、丈の低い灌木帯となるので、眺望がぱっとひらける。

その翌々年に立派なジグザグ路が、ここから頂上にむかってつくられ、さらに外金剛の九龍淵まで延長されて、内外金剛山が結ばれることとなった。それまでは、直経一―二メートルの花崗岩からなっている、長いガレ場を四つんばいになって登らなければならなかったのである。しかし、私にとっては、それは楽しい運動であった。真夏の太陽がじりじり照りつけていたが、空はあくまで高く、空気は乾燥し、さわやかであった。岩に生えている苔のかさかさした感触も快い。

ガレ場を登りきると、尾根伝いに、頂上に達することができる。毘慮峰はこのあたりで、もっとも高い峰なので、さすがに眺望をほしいままにすることができた。はじめて登った毘慮峰の頂の一時間を、私は忘れることができない。金剛山の壮大さをとおして、山の力強さと、それをうけとめる人間の力との関係を、しみじみ悟った……ような気がしたのである。

海に近い、外金剛の岩山の彼方から、雲が湧いて、いつのまにか、私は独り霧のなかにいた。霧は湯気のようにあたたかく、こまかい水滴を含んでいた。ガレ場を降りはじめたころ、下から数人の男が登ってきた。それが、私らを含めて、あとにもさきにも、その日、毘慮峰に登った人間のすべてであったから、金剛山の長閑な時代であった（『遙かな山々』『泉靖一著作集7 文化人類学の眼』読売新聞社、1972年、初出『アルプ』1967年8月～1970年6月号）。

日韓併合期に刊行されたある書物は、金剛山をして「世界無比なり。この絶景地境に沢山の寺刹あり。金剛山は内金剛と外金剛に分かれ、別に海金剛あり。各特色ありてその自然の美を発揚し居れり。この景勝は朝鮮一にて内地にも類例少なき景勝地なり」（早田伊三編『朝鮮机上便覧』大阪屋号書店、1928年）という。しかし泉の文からして、この時代に金剛山の地にまで足を踏み入れる人間はまだ稀であったようだ。しかし泉も言及する金剛山電気鉄道（私鉄）で長安寺のある内金剛の麓までのアクセスが可能になり、さらに朝鮮総督府鉄道の東海北部線で外金剛の麓まで到達できるようになると、金剛山は多くの観光客を引き付けるようになり、その風貌を少しずつ変えてゆく。金剛山の岩山の魅力については安倍能成のエッセイがよい。1939年夏の金剛山体験であるが、安倍的このときの金剛山行は十余年ぶりのことで、以前の訪問は十月半ばのことだったらしい。

金剛山の景色の最大の特色は勿論岩石にある。岩の美しさ立派さは、京城付近の北漢山、道峰山、水落山、仏岩山等においても、これを見出すことは出来るが、金剛山は実に朝鮮中の岩石の集会といってよい位、ありとあらゆる形の岩峰を鍾めている。これだけ地域が広くそうしてこれだけ密集的に岩のあるということが、先ず金剛山風景の特質を形成するものだといってよい。それにこの岩峰の一つ一つが高く大きく、ずばぬけた規模を持っていて、しかも数がすばらしく多いのだから、日本のこれに類した景色、例えば甲州の御岳だとか上州の妙義などは、到底足下にも寄りつけないわけである。

岩の形によって色々な名、殊に仏教に基づいた名前が多くつけられているが、それは寧ろ煩わしい位で逐一挙げてはいられない。しかしその形状が多種多様で、或いは秀抜であったり、或いは雄偉であったり、或いは怪奇であったり、それこそ造化の巧の測りがたさを想わせることは驚くべき程である。今その一例を挙げて見れば、九成洞

の清流壁というのは、大きな岩山の広い滑らかな斜面を形作る鉄色の板のような岩壁の上に、水が薄く光って流れており、その岩壁に田の畔のような割れ目があって、そこに黄色の萱草^{かんぞう}に似た花が群れ咲いている様は、実に雄大と優美とを兼ねた何ともいえない景色である。その付近にある暎楓溪という所も、周囲がちょっと開豁で、その溪水のみならず、溪中の岩石までが、金剛山中第一と称せられるこの溪の紅葉に映発する美しさの、まことに想像に堪えたるものがある。上登峰の峠から前面に五峰山、万物相、新万物相、水晶峰、千仏山あたりを望み見た時には、殊に三つの万物相が金剛山の岩の大観を代表していることを、まざまざと感ずることが出来た。この半ば以上に樹木を多く有しない、夏の最中にも金剛山の冬の称呼たる「皆骨」の趣を露呈し、水によって柔^{やわ}らげられず、白けたまた茶色をしたそっけない色で、空の青さと相映闘している岩峯の嶮しさ、厳しさ、力強さ、逞しさを眼のあたりにして、私は心の驚きを压えることが出来なかった。

色に就いても、岩の風化の程度によって、又それに付いた苔等によって様々であることは、いうまでもない。ただ今度特に感じたのは、九龍淵の岩壁の褐色もしくは紅色を帯びた色であった。同行のI画伯の話によると、こういう色の花崗岩が最も上質と称せられるのだそうであるが、今度帰京して新築の帝室博物館の床を見ると、それはまさしくそういう花崗岩の磨き立てたものであった（安倍能成「金剛山の風景」『権域抄』斎藤書店、1947年、247～248頁）。

赴戦高原の近代的景観

金剛山は江原道の現在では北朝鮮側に位置するが、そのさらに北方に位置する赴戦^{ふせん}高原の魅力を語る者もいる。1930年代半ば、この地を訪ねたジャーナリスト市瀬五郎^{いちのせごろう}の文である。

「朝鮮に風光の美なし、従って朝鮮の民衆は風景に対する憧憬を持たない」

と、こういうような考えを内地人は今日まで漫然と抱いていた。かくいう私も朝鮮の土地を踏むまではそう考えていた一人であったことを白状しなければならない。

ところが朝鮮に来て見ると事実は想像を雲泥の相違であることに驚いた。

朝鮮の山河は決して内地のそれの如く明媚とか古風な絶景だとか、いう種類のものではない。

人間の生活が如何にもおだやかに山村水廓^{さんそんすいかく}につつまれている姿ではない。

だから内地の景勝^{けいしょう}は一瓢を携えて享樂するに適するが、朝鮮の山河はそんな生やさしい応対をしてはくれない。

大都会に人口が集中して山村水廓の生活に、なじみの少なくなった現代では、山々とか里とかいうものに対する憧れも次第に稀薄になって来たことは事実であろうが、それでも尚内地人の心の奥には山や里に対する憧れが残されている。

ところが朝鮮の山河は人間を威圧しているのだ。

私は平壤から元山に至る道路を自動車ですぎた。また赴戦高原を歩いて見たが、その風景は断じて感傷をそそる底の生やさしいものではなかった。

如何にも雄大であり、威圧的であり、漢詩にはなるが、断じて童謡などにはなるべき山容ではないのである。

平安南道陽徳温泉の朝である。

山は朦朧として煙っている。その山々がほんのりと白く裾をばかして立てる足下を一筋の小川が流れている。

小川の両側には藁葺の朝鮮家屋が立ちならぶ。

白い着物、単純な立体的構造の姿態、それがぼつりと現れてぼつりと消えてゆく。

南画ではない、まさに北画だ。

私は朝鮮に来て初めて朝鮮風景の豪宕^{ごうとう}さと美しさに打たれたのであった。

これは正に東洋の風景美だ、内地の風景もいいと思うが規模が小さい。朝鮮の風景は実に雄大である。

朝鮮の風景は飛行機の上から鑑賞する現代人の嗜好に合致している。しかも朝鮮の風景は東洋風景の圧巻だと思う。

恐らく支那にもこれ程の風景はあるまい。

従って朝鮮風景は未だ知らない者に一向興味を与えないが、一度その地を踏めば断じて忘れ難き印象を刻みつけるのである。

大体、風景に対して朝鮮は無関心であったかのように思っている者が多いのだがそれは朝鮮を理解せざるものだ。

朝鮮が風景に対する関心がある証拠には、景勝の地にはどこにも「亭」を造って眺望を楽しむことにしている。

もとよりこの「亭」は封建貴族の建設したものでありその豪華を語るもので、反面苛斂^{かれんちゆうきゆう}誅求の記念塔とも見るべきものであろうが。かくの如くにしてまで、風景を満喫したいということは、出来得べくんば誰もがやりたい希望をその出来る人が現実に実行したということに過ぎない。

それに朝鮮の寺院は必ず景勝地の最も眺望よき地に建てられている。

これも朝鮮の民衆が風景の美を愛するが故に、民衆を相手とする宗教家が宗教の上に風光の魅力を持って来て、宗教宣伝の具に供したと思われる節々がある。

朝鮮民衆の風景に対する関心を知るべきであり、それだけ朝鮮の風光が人を惹きつけるものが、あることを悟るべきである。

又、赴戦高原の景観の雄大さは、天下にその比類を求めるのが困難なぐらいである。

従って吾々凡愚の徒には、ただその高原のひろがりに瞠目しその山塊の偉大なる姿に驚異を感じるのみでこれを資本主義の機構の下に活用しようなどという考えは毛頭起こる余地がないのである。

風景として赴戦高原を見ると、今までの風景観にとらわれていた人達はそのとりとめのない茫漠たる景観に失望するかも知れない。

然しそれに大水力発電所があり、人口湖水があり、千分の七百という傾針をもったインクラインがある。この大人工を施したところに赴戦高原の近代的景観がある(市瀬五郎『半島は廻転^{めぐ}る』朝鮮問題調査会、1936年、354～357頁)。

市瀬五郎がいう大水力発電所や人口湖水とは、1920年代末から30年代半ばにかけて

日窒コンツェルンの出資により建設されたもので、鴨緑江水系に大規模な発電所が建設されたのに加え、興南には世界最大規模の化学コンビナートが建設、8年の歳月をかけて1944年に完成した水豊ダムは世界最大級といわれた。日窒（日本窒素肥料）は当時日本の最大の化学工業コンツェルンであり、野口遵（1873～1944）がその創業者である。戦後、日窒コンツェルンは外地の資産を失うとともにコンツェルンは解体される。今日のチッソや旭化成や積水化学工業はその系列企業である。

日窒コンツェルンや野口遵については二度驚かされたことがある。一つは戦後、北朝鮮がそのプロパガンダ雑誌等で日窒が建設した工場やダムを社会主義朝鮮の成果のように宣伝し、それに日本のインテリや在日たちがまんまと騙されていたということを知ったとき。野口の遺産は解放後の北朝鮮に莫大な電力や国力というだけではなく、威力をももたらしていた。北朝鮮はその国章に水豊ダムを描き、市瀬が「近代的景観」と呼んだ風景を「千里馬の国」のアイコンとしてしばしば活用した。もう一つの驚きは日窒コンツェルンの一工場であった熊本県の水俣工場が戦後、その工業廃水のために水俣病という一大公害事件を引き起こしていたということである。

先に泉靖一の「遙かな山々」を引用したので、「城大生」（京城帝国大学）を連れて赴戦高原登山を行った竹中要（1903-66）の日誌も紹介したい。遺伝学者の竹中は当時京城帝大予科の教授で、1935年7月、予科学生約30名を引率して登山を実施。学生の中には「城大生」となった泉靖一も含まれている。登山四日目の7月18日の日誌である。

昨夜霧が天幕を打つ音が一、二回聞こえたが、遂に雨にはならず一八日の朝は訪れた。東側北水白山の彼方より日は方に登らんとしている。少々朝焼けだ。午後天候は崩れはしないだろうか、一寸心配だ。十幾張かの天幕の若者は元氣よく起出でた。遮日の東南部は赫々と燃えている。光は次第にキャンプサイトの鞍部を照らす。その間に各組共炊事を終わった。昨日採ったシロウマ〔白馬〕アサツキのお汁が何のパーティーにも評判がいい。余はエゾノイソツツジ〔蝦夷磯つつじ〕のお茶を作った。大変喜ばれた。昨日はトウヤクリンドウのお茶を作って健胃剤兼用で賞味された。山の幸は嬉しい。

七時頃各パーティーとも合計二十七人の若人は胸にエーデルワイスの花をつけ、二、三日後の再会を約して握手を交わし、夫々のコースへと出発した。余ら第一班は第二班の一部と共に南走して北水山を通り、南水峙に向かうのである。途中霧が可成深まり、地図と磁石を頼りに南水峙に向かったが、藪くぐり多きため時間を空費して、南水峙の少々北方標高二千九十六米の大密林の中で早くも午後四時となった。そこで第二班の一部と袂を分かった。彼等は直ちに西の谷道安川の支流に下った。余等は南水峙に辿りつき、六時頃天幕を張った。南水峙付近は千古不伐の原子林で、その中に新旧の路が所々に交叉して余等を悩ました。二、三日前泉〔泉靖一〕達第三班が南水谷を下るとき大変困って、遂に雨の中に半ば迷ったまま寝たと云うのも無理からぬ。困ったときの標識用に使った赤黄色旗が連絡用に残してあって大変好都合であった。

大密林の中で山の如く積んだ贅沢な焚火を囲んでの夕食に山窩の生活をしのぶ折柄、十八日の月は下の谷から昇ってサルノオガセ〔猿麻棒〕の懸れるトウヒ〔唐檜〕の森林を透して現れる。子供心に何時か何処かで見た様なまぼろしの森の精の国そっくりである。バチバチと焚火の弾く音、小鳥の羽ばたく音に夜は更ける（竹中要『半島の

山と風景』古今書院、1938年、77～78頁）。

林野の状況

『半島の山と風景』にある朝鮮林野の状況を概観した文も引用しておきたい。李氏朝鮮時代の仏教弾圧が寺刹を山奥に追いやったことは知っていたが、それが結果的に朝鮮の森林保護に役立っていたことを知ったのは、この文を通してである。

内地から朝鮮に渡った人々は異口同音に朝鮮の禿山を取り立てるが、実際朝鮮においては事実上禿山が多いのである。すなわち朝鮮における林野の総面積は約千六百四十七万町歩であるが、そのうち五分の四は荒廃せし無毛の地で、かつ林野の面積が朝鮮全土の七割四分に当たることを思えば、荒廃せし無毛の林野は全朝鮮の六割に相当するのである。その上立派な樹林を持つ林野は主として北鮮〔この時代には咸鏡道を指す〕地方に集まっていて、人目に触れない範囲に多い。かつて植物分類学の権威たるドイツのエンゲレル教授が、大正二年朝鮮を通過して、その沿道の荒廃せるを見て、朝鮮の植物を取り調べる必要がないと言ったと伝えられている。これも至極もつともなことで、朝鮮の鉄道〔京釜鉄道を意味する〕は日清、日露両戦役のために火急に架設せられたもので、なんら経済的あるいは風景的条件を考慮に入れられたものでもなく、かつまた鉄道架設と共にもともと濫伐に濫伐を重ねて見る影もない貧弱なる森林がなお伐採せられたのであるから、一層荒廃が目立つのである。しかのみならず近年松毛虫の発生が著しく、わずかに見られる松の疎林さえ枯れ死に瀕せんとしている。しかし幸いなことには全鮮に散在している千三百三十三個寺の寺有林はその七割強に当たる十一万六千余町歩が立派な森林を保っているし、その他東部海岸に沿っている山脈、北鮮山岳地帯には所々に今なお立派な原始林が見られる。

さて、このごとく荒れ果てた朝鮮であって、釜山から汽車に乗って北上すれば松やクヌギの疎林が丘陵性の低山に見られ、平地には村落付近に楊柳が散在し、それにかつて一度総督府で植えさせたポプラとニセアカシヤが河畔や路辺に残余しているだけであるが、詳しく調べると、昔の植生の影響が至る処に偲ばれる。朝鮮の植物について研究された事柄はまだ鑑別学の域を脱していないが、今より約二百十年前、西洋人たちによって調査され初め、その後露国人たちによって研究され、近來は主として東京帝国大学理学部中井猛之進教授によって調査記録されている。その結果、朝鮮所産の高等植物の知られたものは百六十科、八百八十属、三千五十九種、五百四十六変種（昭和二年迄）の多きに達し、そのうちには朝鮮固有種も夥しい数にのぼるのである（同上、91～93頁）。

植物学者の植木秀幹^{うえきほみき}（1882～1976）によれば、赤松こそが朝鮮の風景である。水原高等農林専門学校教授の植木は朝鮮の緑化に貢献した人であるが、食用可能な野生植物、栽培植物387種について、その産地や産額、採取季節、食用法などを記した『朝鮮の救荒植物』（朝鮮総督府山林部、1919）という著書もある。引用は朝鮮金融組合連合会の機関誌『金融組合』の「随筆」欄からのもので、以後、同誌からの引用を時折試みる。

樹種が地方色に著しき影響を与えることは日本内地と朝鮮との風景の比較をもって見ても説明を要しないであろう。数ある樹種の中にも常緑樹と落葉樹とによって冬の景致に非常なる相異を生ずる。朝鮮の代表的常緑樹は赤松であって、赤松は朝鮮の風景そのものであるとも言い得るのである。されど全羅南道の多島海においては済州島を始め、莞島、甬吉島など全く九州、四国あたりの景致を連想し得る所もある。そのまっておる所の理由となるものは共通なる常緑闊葉樹[広葉樹]が存在しておるからである。あるいは同じ常緑樹が育っておるほど気候が似ておるとも言えるであろう。例えばカシ類、シイ、タブ、ヤブニクケイ、シロダモ、ツバキなどの常緑闊葉樹が鬱々として茂っておって、ツバキの花の咲き乱れておる三、四月頃には鶯、目白などが谷から谷へと鳴き合っておる。さてこの常緑闊葉樹は半島本土においては南端の外、殆ど自生しないから、ここに急激なる風景の変化があるのである。竹は常緑である。南鮮地方には竹藪が少なくないので、地方的には日本内地に似た感を与える。竹の産するは忠南、忠北、江原の南半以南である。

(略)

以上述べた通りに、南は常緑闊葉樹あり、北には常緑針葉樹あり、その両者を綴るに赤松をもってするのが朝鮮の常緑樹帯の特徴であるが、これがまた朝鮮の景致を支配する大なる因子でもあるのである。

この自然の配置は人為をもって動かすことの出来ない法則に支配されておるのであるから、高山産の針葉樹を下界に持って来てもその自然美は味わわれぬばかりでなく、その生命すらも危険であり、南方の常緑闊葉樹を北方に移すことは尚更許されぬことである。

吾人はしばしば庭園、公園などにおいて比較的^{とうひ}低地に強いビャクシン、イチイ、ツガなどの外に外国産の常緑樹を見る。例えばドイツ唐檜すなわちスプリースのごときは低地にも耐える比較的丈夫な針葉樹であり、ヒマラヤシダーのごときは南方に適する優美なる針葉樹である。公園などには、外国にても外国の樹種を見るのは普通であって、例えばわが国の青木葉やヤツデが欧米の各地の公園に見いだされ、チェリー、ローレルという大形の葉を有する桜科の常緑灌木は小アジア辺の原産であるが、欧米の公園にしばしば見いだされる。

かくの如く人目をひく特徴のある常緑樹はその地に適する限り、外国産でも大いに取り入れて賞観を恣にする^{ほしいまま}ことは歓迎すべきである。しかしながら、それは局部的の景到のことであって、この大自然を人為をもって根本的に覆すことは許されない。されど人為をもって破壊せられたる天然を原形に復することは人為にてなし得らるることではあるが相当の努力を要する。例えば朝鮮の景致の特色は赤松ではあるが、赤松を一層多からしめたるは人為であって、原形としてはもっと落葉闊葉樹(ナラ類、カエデ類、ニレ類、シデ、ハリギリ、シナノキン類)が増加すべきである。濫伐、火災などの人為の結果として増加したる赤松には松毛虫の被害が増加して緑化を夥しく害しておる。赤松が原形に近づいた時は、そこに落葉樹の美が増加するであろう。同時にまた赤松も健全なる緑色の美を発揮するであろう。

しかしながら経済的企業は自然を破つてある有利なる樹種を造林して天然を変化す

る。ゆえに将来の自然美なるものは、原形に帰りたるそのままの姿と、さらにこれを人工により調和よく合理的に制服し得たる時に健全に生存し得るのである。しかして常緑樹は自然の調和を維持する上に、落葉樹と共に重大なる役割を成すのである（植木秀幹「常緑樹」『金融組合』1938年7月号、118号）。（以下、次号）